

生涯学習社会における「情報を使う力」

— 学びを支える図書館 —

野末 俊比古

はじめに

1. 現代社会における「情報」の意味
2. 「生きる力」としての情報リテラシー — 情報活用と図書館による支援 —
3. 「指導サービス」の構築と展開 — 大学図書館の教育・学修支援を例に —
4. 生涯学習・発達・活躍と情報リテラシー — 図書館の位置づけ —
5. 「情報リテラシーと図書館」をめぐる枠組みづくり

おわりに

参考文献…… 選択的に挙げる

- 日本図書館協会図書館利用教育委員会編『図書館利用教育ガイドライン合冊版：図書館における情報リテラシー支援サービスのために』日本図書館協会，2001
- 日本図書館協会図書館利用教育委員会編『情報リテラシー教育の実践：すべての図書館で利用教育を』日本図書館協会，2010
- 拙稿「情報リテラシー教育の「これまで」と「これから」：図書館におけるいくつかの論点」『情報の科学と技術』64(1), 2014.1, 2-7

講師紹介…… のすえとしひこ 青山学院大学教育人間科学部准教授。学術情報センター助手，文部省社会教育官，青山学院大学文学部専任講師・助（准）教授，国立国会図書館図書館研究所非常勤調査員，国立情報学研究所客員准教授などを経て現職。2010～11年，英国シェフィールド大学情報学大学院（Information School）に客員准教授（visiting lecturer）として滞在。日本図書館協会図書館利用教育委員会委員長，調布市図書館協議会委員長，日本教育情報学会評議員なども務める。近著に『学校図書館メディアセンター論の構築に向けて』（勉誠出版，2005，分担執筆），『情報の達人』（全3巻，紀伊國屋書店，2007，共同監修），『専門資料論』（新訂版，日本図書館協会，2010，共編著），『問いをつくるスパイラル：考えることから探究学習をはじめよう！』（日本図書館協会，2010，監修），『新しい時代の図書館情報学』（有斐閣，2013，分担執筆），『情報資源の組織化と提供』（東京大学出版会，2013，分担執筆）など。専門分野は図書館情報学・教育情報学，関心領域は情報リテラシー教育。1997年，東京大学大学院教育学研究科博士後期課程満期退学。1968年，静岡県浜松市（旧引佐町）生まれ。E-mail: tnozue@ephs.aoyama.ac.jp

参考資料(1) 『図書館利用教育ガイドライン 総合版』(日本図書館協会, 1998)〔抄〕

図書館利用教育・利用支援は、個々それぞれの図書館、また各館種が孤立した形で行えるものではない。各図書館の設置母体はもとより、図書館団体、教育機関等が協力し、総体となっ

I. 総論

このガイドラインはすべての利用者が各自の状況に合わせて図書館の活用能力を身につけられる体制を確立するために、関係者が実施すべき指針である。

1. 定義

図書館利用教育とは、すべての図書館が自立して図書館を含む情報環境を効果的・効率的に活用できるようにするために、体系的・組織的に行われる教育である。

2. 意義

図書館の活用能力を身につけることは、人間の成長と自立の大切な要素であり、それは情報化社会・生涯学習社会とされているこの時代を生きるすべての人にとって欠くことのでき

ない基礎的能力である。

ない基礎的能力である。

3. 対象

現に図書館を利用している、いないにかかわらず、すべての利用者である個人またはグループを対象とする。

4. 目的・目標の設定

目的・目標は、利用者のニーズと情報利用能力の到達度に合わせて設定するべきで、次の5つの領域が考えられる。

- ・領域1：印象づけ
- ・領域2：サービス案内
- ・領域3：情報探索法指導
- ・領域4：情報整理法指導
- ・領域5：情報表現法指導

II. 目標

領域1 印象づけ	領域2 サービス案内	領域3 情報探索法指導	領域4 情報整理法指導	領域5 情報表現法指導
以下の事項を認識する。 1. 図書館は生活・学習・研究上の基本的な資料・情報の収集・蓄積・提供機関 2. 図書館は資料・情報の受信・発信・交流の拠点 ：	以下の事項を理解する。 1. 自館の特徴 2. 施設・設備の配置 3. 検索ツールの配置と利用法 4. 参考図書・ツールの存在と有効性 ：	以下の事項を理解し習得する。 1. 情報探索法の意義 2. 情報の特性 3. 情報の評価のポイント 4. 資料の基本タイプと利用法 ：	以下の事項を理解し習得する。 1. 情報内容の抽出と加工(要約、引用、言い換え、抄録、翻訳、解題等) 2. 情報内容のメディア別の記録法 ：	以下の事項を理解し習得する。 1. 情報倫理(著作権、プライバシー、公正利用等) 2. レポート、論文、報告書、資料の作成法(構成、書式、引用規則等) ：

III. 方法

領域1 印象づけ	領域2 サービス案内	領域3, 4, 5 情報探索法指導 情報整理法指導 情報表現法指導
1. ポスター、ステッカー、ちらしなどによる図書館の存在のアピール 2. 地域、親機関の広報媒体による図書館紹介 3. 図書館の位置を知らせるサイン ：	1. パンフレット、リーフレット 2. 案内ビデオ(字幕、外国語等) 3. 館内サイン(定点、誘導) 4. CAI ：	1. 講習会、ワークショップの開催(特定情報の探し方、レポートのまとめ方、インターネットの使い方、特定分野に関するCD-ROMの使い方、コンピュータ利用のプレゼンテーション技法等) 2. 独習用ツールの設置(AV, CAI, ワークブック, テキストブック等) 3. パンフレット、リーフレットの配布(バスファインダー、文献・資料リスト、機器・資料の使い方マニュアル等) 4. 機器・資料の使い方サイン ：

参考資料(2) 拙稿『『単位』と『図書館』の密接な関係』(『青山学院大学図書館報 AGULI』No.92, 2012.4.1, p.5)

本学では、半期の講義科目に合格すると2単位が認定されます。1単位は45時間の学習(学修)に対して与えられるので、2単位には90時間の学習が必要です。授業時間1コマ(90分)は2時間分と計算されますが、15週(回)あっても30時間にしかありません。残りの60時間は授業時間以外に学習することになっており、あわせて90時間とされているのです。

授業時間以外の学習は、辞書を使って語学の予習をしたり、講義の復習をして試験に備えたり、といったことに留まりません。レポートなどの課題が出されたら、書籍や論文を読み、インターネットでデータを集め、パソコンで整理・分析したり、文書を作成したりします。グループで取り組む場合は、机上に資料を広げて、パソコンのモニタを囲んで、話し合いながらプレゼンの準備をすることもあって良いでしょう。もちろん、教員に指示された課題をこなすだけではありません。自身の興味・関心に応じて、講義で取り上げられたトピックの背景となる理論や歴史を文献で把握したり、最近の動向や事例を新聞記事のデータベースで確認してみたりすることも期待されています。静寂な空間で(あるいはカフェでくつろぎながら)一人で書籍と対話しながら思索を重ねることや、友人との会話や討論を通して考えを深めることも大切な学びです。

このように、授業時間以外の学習にはさまざまな「資源」が必要です。施設・設備・機器(パソコンなど)などはもちろんですが、授業に関連した書籍・雑誌など(電子版を含む)の資料が過不足なく揃えられていることが特に重要です。加えて、文献の探

し方、プレゼンの仕方、レポートの書き方などを教えてくれたり、相談に乗ってくれたりする「専門家」がいることも大切です。このように(人的資源を含めた)資源を集約した「学びの拠点」がキャンパスに整備されることによって、60時間を超える授業時間以外の学習を充実させることができます。

大学図書館は近年、「学びの拠点」をめざして、学習支援の機能を強化しています。本学においても、かかる機能に特化した新図書館を建築する計画が進められています。図書(だけ)の館ではないので、学習資源や学習支援のセンターと表現するほうがイメージに近いかもしれません。自主性のみ委ねた学習ではなく、教育的な意図・目標(カリキュラム)に基づいた主体性のある学修を実現するための「学習図書館」として、時代をリードする日本一の図書館となるはず。なお、学習図書館は学生だけのものではありません。教員なども、教材の準備や学生との交流などに利用します。教育支援も学習図書館の重要な機能なのです。

最後に、学習・教育支援機能(学習図書館)とともに、大学図書館のもうひとつの重要な役割である研究支援機能(研究図書館)の拡充が不可欠であることに触れておきます。学問(学術)の府である大学においては、優れた教育は優れた研究によってこそ成り立ちます。研究図書館を利用するのは教員などだけではなく、学生も、ゼミや卒論のように「自分のテーマ」を探究していくときなどに活用することになります。

(教育人間科学部准教授 図書館情報学, 教育情報学)